

「キャリア・サポート研究会」レポート

キャリア・サポート研究会は主として、財団が「キャリア・サポーター」として認定した教職員の自己啓発の場として設けられているが、今回は対象を「未来ノート」の購入者にまで広げて、2月15日(木)13時から17時まで開催された。第1回目の研究会では『未来ノート』を活用したキャリア教育の事例と模擬授業』をテーマに、新しい教育や学習の潮流の基本的な理解をするとともに、それを学校現場でどのように活用していけば良いのかについて理解を深めた。

具体的には、キャリア・サポート事業運営委員会の船山委員が司会運行をして、アクティブ・ラーニング型ワークブックの「未来ノート」の内容・授業運営の仕方と実際に活用している学校の事例を学ぶことにした。

1. なぜ、キャリア教育にアクティブ・ラーニングが必要か

わが国の学校教育の基本的な方針を定めているのが、文部科学省の中央教育審議会である。その是非については多様な意見もあるだろうが、われわれは大なり小なり、その影響を受けることになる。そこで、キャリアやアクティブ・ラーニングについて、その教育の方向性を良く理解しておくことは重要なので、筆者より以下のような若干の情報提供を行った。

キャリアとキャリア教育について

中央教育審議会の答申(2011年)では「キャリア」および「キャリア教育」の概念についてつぎのように明文化している。

- ・人は「働くこと」を通して、人や社会にかかわることになり、そのかかわりの違いが、「自分らしい生き方」となっていくものである。
- ・人が生涯の中で様々な役割を果たす過程で、自らの役割の価値や自分との関係を見出していく連なりや積み重ねが、「キャリア」の意味するところである。
- ・一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育が「キャリア教育」である。

このことから、キャリアは極めて個人の人生に密接にかかわったものなので、教職員が他の教科のように正解を教え込むことは適当ではないことがわかる。つまり、学生一人ひとりが自らの頭で自らのキャリアのあり方を導き出すことしかできない。そのために、課題に主体的に取り組み、対話の中からの深い学び得るというアクティブ・ラーニングの学習法が有効になってくるのである。

アクティブ・ラーニングについて

中央教育審議会の用語解説（2012年）ではアクティブ・ラーニングを次のように定義している。

- ・教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。
- ・学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である。

今日、アクティブ・ラーニングが必要になるのは、基本的には学生の学びの質保証が求められており、学習目標を達成して、それを現実の社会で活用できるようになることが求められているからであり、それは、従来からの一方的な教育からの脱却なしには難しい。

なぜならば、複雑化した社会では固定化した知識の伝達だけでなく、時代の変化に対応して、様々な情報を主体的に取り込み、自分のものにしていくには、「主体的・対話的で深い学び」が求められているのである。また、キャリアのアイデンティティを確立していくためには、他者との関わりで起こった、自己の中の揺らぎから、新たな価値観や観念を再構築していく体験が重要になるからである。

しかし、アクティブ・ラーニングには、つぎのような課題があることも事実である。

- ・受け入れるための素地づくり（環境、意識、教材、授業デザイン）が煩雑である。
- ・学生に現在の価値観や考えの枠を揺さぶられることへの抵抗感がある。
- ・グループワークが活性化せず、雑談に終わることがある。
- ・学習の力に格差が出て、学びの質に格差が出やすい。
- ・教職員の技量によって、学習成果にバラつきがでる。

そのために、授業の構造化とそれを可能にする教材の開発、そして授業運営のスキルの向上が、いま以上に求められることになる。

2. 「未来ノート」のねらい・構成と模擬授業の体験

「未来ノート」はアクティブ・ラーニング型のワークブックとして改訂されたが、その開発目的、学習目標、学習内容の構成について、財津委員より説明が行われた。詳細については「未来ノート」の研修と重なるところがあるので省略する。

その後、ファシリテーターを努めて頂き、実際に参加者にアクティブ・ラーニングを体

感して貰う意味から、ピア・ラーニングによるグループワークを行ない、「未来ノート」の1セッションについて、その「教員用ガイド」の理解を深めた。

ピア・ラーニングは協同学習の概念の一つであり、池田玲子（東京海洋大学）はつぎのような特徴を挙げている。

- ・ピア（peer:仲間）と協力して学ぶ（learn）方法で、知識の生成は他者と働きかけあう中で影響を受ける。
- ・学習者自身による主体的な学習を重視した実践方法である。
- ・仲間との相互作用によって、理解の深化がもたらされる。
- ・「他者」によって、「対象」への考え方や理解に対して、「自己」の変容が促される。
- ・学習者が自律的・創造的に学ぶことが出来るように、教員は引き出しのサポート役に徹する。

今回、ピアで学んだ1セッションについて、ILP お茶の水医療福祉専門学校（福岡県）の歌野裕子氏が自発的に先生役となり授業運営を行い、他の受講者が生徒役になって模擬授業を体験したが、「未来ノート」についての理解がより促進されたものと思う。

3. 「未来ノート」を活用している東放学園の事例紹介

東放学園は毎年、約 290 名の学生に「未来ノート」を活用して、キャリア教育を行っている。その事例を進路指導担当主任の岡村朗先生から実際の授業についてご紹介頂いた。詳細については、後日、根本委員が専門学校新聞の「キャリア教育のヒント」シリーズに寄稿する予定なので、掲載されたらキャリア・サポートニュースで紹介したいと思う。

キャリア・サポート事業運営委員長 小野 紘昭（記）